

小川未明文学館 館報

第三号

小川未明文学館

vol. 3



小川未明文学館

新潟県上越市本城町八ノ三〇（高田図書館内）

TEL 025-523-1108 3

FAX 025-523-1108 6



小川未明文学館（高田図書館内）

小川未明文学館は、高田公園（高田城址）の外濠のほとりの図書館の中にあります。未明が子どもの頃から親しんだ妙高山、南葉山を背景に、桜、蓮、紅葉、雪景色がそれぞれの季節を彩り、訪れる人たちを楽しませてくれます。

小川未明文学館 館報 第三号
二〇〇九年五月三十日発行（年刊）
目次

【寄稿】	若林敦 「詩集『あの山越えて』—小説との対応—」	2
【収蔵資料紹介】	福田正夫宛小川未明ハガキ	6
【報告】	平成二十年度特別展 「小川未明の東京—童話作家宣言まで—」	8
	文学館講座「小川未明の詩」	9
	文学館一年の記録（平成二十年度）	10
【作品の中の風景②】	東京・雑司ヶ谷	12
【小川未明文学賞】		13
【ボランティアネットワークだより】	「のぼら vol.5」	14
【文学館からのお知らせ】		16

〔寄稿〕

詩集『あの山越えて』

—小説との対応—

若林 敦

(長岡技術科学大学准教授)



一

昨年十一月の文学館講座（「小川未明の詩」）でお話する機会をいただいた。依頼されたのは、未明の詩集『あの山越えて』について。「えっ、未明って詩集があったんですか？」「恥ずかしながら、その時までそのことを知らなかった。

童話作家として文学史上に揺るぎない地位を確立し、また、出発期には「ネオ・ロマンチズム」の作家として認められていた未明に詩集がある！ いったいどんな詩を書いていたんだろう…。聞けば、大正のはじめにまとめられたものだという（大正三年一月刊）。なるほどそれ以前の詩であれば、ちょうど私が研究対象としてきた時代と重なる。未明の詩は、文学史のどのような流れの中に位置づけられるのだろうか。そこには、どのような世界がひろがっているのだろうか。そこにわかに興味が湧いてきた。それにしても、未明の詩には、これまでお目にかかったことがないよなあ…。

さつそく文学館から詩集のコピーが送られてきた（詩集は活字化されていないので、容易には手に入らない）。それを読んで、当惑した。「わからない！」。そう、言っていることがわからない詩が多いのである。中にはこんなまで載っていた。

唄

……コreshヨ、

……エイ、エーイ……

何、これ？ そして、その左ページには、こんな「詩」。

唄

水の行衛に身の行末を

思や夕暮花が散る……

こりや、小唄だよね。

この詩の隣に挿絵がある。縦長の画面下半分に機台^だ、左上隅に釣りランプ、右上四分の一に四角く開いた窓、その外には遠く山の稜線と、その上を小さく列をなして飛ぶ四羽の雁。

二

攻めあぐねた。未明はこの詩でいったい何が言いたいんだ？ これは彼のどのような内面を表した詩なんだ？ 私たちが〈近代詩〉を読み解くしかたで近づくかぎり、これらの詩の意味はまるでちんぷんかんぷん。未明はいったいどんな背景で「水の行衛に身の行末を思^{おも}」ったりしたんだい？

悩んだ。いろいろなアプローチを考えてみた。結局、一番いいのは、未明のほかの作品の世界に手がかりを求めること、そこで描かれている内容に、『あの山越えて』の詩の世界との共通性を探ることだろうと思った。未明がこれらの詩と同じ時期に書いていた小説をとにかく読むこと。幸いにも、国立国会図書館の近代デジタルライブラリーで、初期の作品集『愁人』（明四〇・六）、『緑髪』（明四〇・一一）、『惑星』（明四二・二）、『物言はぬ顔』（明四五・四）を見ることができた。驚いた。小説の中に詩があった。例えば、「暗愁」（「愁人」所収）の冒頭にそのまま。

(一)

『水の行衛に身の行末を

思や夕暮花が散る……』

悲哀な、陰気な鄙歌が戸外で聞える。

『では主は行かしやんすかえ。』と女房は涙を落して、旅姿をした夫の袂に縋る。夫は縋の風呂敷包を背肩^{せお}つて、脚絆を穿いて、草鞋を穿いて出かけたが、また立戻る。

先の「唄」（左ページ）は、まさに「鄙歌」だった。この「鄙歌」には、商売に旅立つ夫に一人残される妻が、その「身の行末を思^{おも}」う気持ち为重なっている。すべての詩がこういうふうにあるままの形で小説の中に出てきたわけではないが、それでも、詩と小説との対応が、次々見つかっていった。小気味良いほどだった。

併せて、先行研究も見つけた（※）。そりゃあ、未明の小説を読んで、そして詩を読めば、両者の対応に気付く人がいるのはあたりまえだろう。だが、この先行研究では、小説との対応が明らかでなかったり、見落とされていたりする詩もある。調査を進め、新たに

一五篇の詩について、対応する小説を見つけた。文学館講座の時点で、対応のわからない詩が『あの山越えて』六九篇中一〇篇。その後、文学館の調査により九篇の対応が判明、現時点で残りは一篇である。(詩と小説との対応表を後掲。)

(※) 畠山兆子「未明文学における「詩」の意味―

『詩あの山越えて』と小説「遠き響」を中心に―」
〔梅花女子大学文学部紀要 児童文学篇〕二〇号、1985.12)

三

俄然おもしろくなつた。詩に込められた気持ち、情緒、思いがわかつてきた。次の詩なんか、私はずいぶん気に入った。(文学館講座でも紹介しました。)

無題

海が光るぞよ
血染の帆風
黄色い筈だ
月が出る。

冬の霜よりしんくゝ寒い
刃刃に凝つた月の影、
觸れや手頭が落ちさうに
色もなけりや味もない、
私や、刃金に身を委す。

この詩、実は次のような物語の中で、男の一人がうたう歌なのである。

細く、物哀れに、情のこもつた節がつづく。

刃金はがねの上に身を委まかす

捕らわれた若者は、しみじみと悲しくなつて、つかの間の自分の命のことを考えた。

いよいよ殺される時が来た。研ぎ澄まされた鉞、死骸を入れる箱、血を汲む桶、土竈の下にはとろとろと赤い火。鉞を受け取つた男が、捕われ人の後ろに廻つた…。

盛んに燃え上がった火の手は、次第に衰え、赤かつた炎が黄色へ、白へと変わつていった。「ハ、ハ、ハ、ハ」と厭らしい笑い声がした。再び沈黙に返つた。さらさらと谷川の音が聞こえる。冷たい谷風が吹き、炎がまったく消えかつた。折々びしりびしりと生木の跳ね返る音がして、そのたびに赤い火花が散つた。

「捕はれ人」(『惑星』所収)

このように、この「無題」という詩は、人を捕らえて殺し、その生血と脳みそと骨、そして生肝で商売をする男たちの歌だつた。詩集にある形で詩の大意を示せば次のようになるう。

海が光る。血染めの帆に風を受けて船が進む。海が黄色く光るのは月が出るからだ。

冬の霜よりずっと寒い感じだ、刃金に映る月光は。触れただけで手首が落ちさうで、色もなければ味もない。私は、刃金に身をまかせて死んでいく。

第一連は商いをする海上の光景、第二連は研ぎ澄まされた鉞の刃、第三連は捕らわれ人の運命。これは、

若い猟師が三人の男に捕らえられ、今まさに殺されようとしていた。彼は猟に出て道を間違ひ、山奥に迷ひ込んで二日野宿をした。そして、今日の明け方、三人に捕まつたのだ。三人の男はみな無言で若者を殺す準備に取りかかつている。金が目当てではないらしい。生胆を引き抜き、骨を砕いて、血潮とともに何かを作るのだ。

黒い桶のようなものが二つ運ばれた。土竈どがまに火が焚きつけられた。一人の男が大きな鉞まさろを持ってきた。やがて、男は砥石で鉞を磨ぎ始めた。三人の男はみな砥石と鉞を見つめていた。

両手を縛られた若者は、逃げ出そうにも逃げ出せない。自分がこういう身になるまでは、山奥に住む悪者の噂を聞くことがあつても信じることはなかつた。人間の生血で染物を作つて海の上で売買する、脳みそと骨で丸薬を作り、生胆を売りに旅にでると聞いていたが、実際にあることだとは思わなかつた。

ゴシリゴシリと鉞を磨ぐ音に若者の思いは破られた。この時、研手の男が歌い出した。

海が光るぞよ 血染の帆風 黄色い筈だ 月が出る

歌の調子は、よく里で聞くと同じで懐かしい。若者は涙ぐんだ。男は三人とも歌に心を奪われているようだ。歌は続く。

冬の霜よりしんくゝ浸みる
觸れや手頭が落ちさうに
色もなけりや味もなく
私や、刃金に身を委す
………

男が自分たちの仕事をうたった歌なのである。小説の中では、捕らわれた我が身をはかなむ若者と対照的に、若者を殺す準備を黙々と進める男たちの非情さが、この歌によってさらに際立つ。それとともに、静かな夜の山奥で細く流れる物哀れな歌の節が、場面にしみじみとした情趣をそえる。この歌は、とても効果的に使われている。

四

このようにして、詩集で読んだだけでは何が言いたいのかわからない詩も、対応する小説を見ることで理解できるようになる。『あの山越えて』の多くの詩は、そういう詩である。だから、〈近代詩〉を読むようなわけにはいかない。例えば、この「無題」には、未明自身の内面の直接の投影はない。この詩に込められているのは、対応する小説の登場人物の思いである。未明は登場人物に歌を歌わせ、それを人物造型や場面形成に用いた。その歌を『あの山越えて』に収録した。「水の行衛に」の「唄」は登場人物が直接歌ったわけではないけれど、思いが重なる歌。まだほかにいくつもの詩がそのような歌として小説中に見出された。それを、未明自身の内面の直接の投影と読もうとしたのが、そもそも見当違いであった。未明が「水の行衛に身の行末を思」ったというわけではなかったのである。

『あの山越えて』の詩と小説との対応は、登場人物の歌う、あるいは登場人物に聞こえる歌を収録するようなパターンだけではない。小説の文章のある箇所がほとんどそのまま詩となっていたり、小説の文章を何か所か切り取ってつなぎ合わせた詩だったり。そして、各パターンの詩がそれぞれ何篇もある。

それらの詩の出来不出来はさておき、これまで私が

述べてきたことからだけでも、詩集『あの山越えて』の特異な性格がわかっていただけたと思う。だから、この詩集の読解は一筋縄ではいかない。まず、詩の形について、対応する小説の初出、初版と詩集とで異同を調べるといった最も基礎的な作業がある。また、それぞれの詩が、対応する小説の、誰のどのような気持ちを投影したものか（または、それとは別のタイプの詩なのか）を整理する必要がある。さらに、およそ他に例を見ないと思われるこの特異な詩集を、未明は何を思いついたのか、詩集自体にその答えを探ることが出来るだろうか。同時に、未明の意図とは別に、この詩集、あるいはその詩の価値をどういうところに見出すかということも重要である。研究の課題は多い。

特に、最後の課題に関わって、私は今、未明が小説の登場人物によく歌を歌わせている、または場面によく歌が流れてくることを、興味深く思っている。考えてみれば、当時、歌は生活の中に、仕事とともに、また遊びの中に、今以上にあつたのではなかったか。人々が自分の思いを込め、あるいは気軽に口ずさみ、そうして感情を解放するものとして、歌は歌われ、歌い継がれ、また新たに作られていたのではなかったか。今の私たちが商業化された歌を享受するのは別の形で、歌は明らかに当時の人々の身近にあつた。未明はそういった歌を好み、そういった歌への感受性を強く持ち続けていたように、私には思える。

詩集『あの山越えて』を読み、その詩と対応する小説を読んでいくと、小川未明という作家を解きほぐす糸口がいくつも見えてくるようだ。そして、それは、「自然主義」の窓からでは見えない現実を、「ネオ・ロマンチズム」の窓が開いて見せてくれていたことに通じる。そのことの意義をあらためて考えてみたいと、私は思っている。

付記 引用した未明のテキストは、総ルビをパラルビに改めた。



『あの山越えて』口絵
画：樋口斧太



未明詩集『あの山越えて』
大正3年1月 / 尚栄堂

『あの山越えて』——詩と小説との対応——

	『あの山越えて』	その詩を含む小説	所収作品集	初 出		備考 ○=畠山報告済44篇
1	西の空	水車場	『愁人』	早稲田文学	明40.01	○
2	冬	牧羊者	『愁人』	東京日日新聞	明39.02.19	
3	木枯	水車場	『愁人』	早稲田文学	明40.01	○
4	唄	幽霊船	『緑髪』	新古文林	明40.01	
5	白い樞	樞	『緑髪』	早稲田文学	明40.08	○
6	寂寥	寂寥	『北国の鴉より』	文章世界	明44.01.15	○
7	曠野	寂寥	『北国の鴉より』	文章世界	明44.01.15	○
8	闇	闇の歩み	『闇』	新潮	明43.03	
9	夜	夜の喜び	『北国の鴉より』	早稲田文学	明44.09	
10	月琴	寂寥	『北国の鴉より』	文章世界	明44.01.15	○
11	淋しい暮方の歌	沈黙	『緑髪』	東京日日新聞	明39.03.19	
12	管笛	鉄片	『北国の鴉より』	新声	明42.01	○
13	ひまわり	(未詳)				
14	古巢	燕	『北国の鴉より』	新潮	明45.05	○
15	白雲	雲の姿	『愁人』	中央公論	明39.05	○
16	水星	空想家	『愁人』	早稲田文学	明39.08	○
17	怨み	暗愁	『愁人』	八ガキ文学	明39.07	○
18	暗愁	煎餅売	『愁人』	女子文藝	明39.07	○、(注1)
19	梨の花	暗愁	『愁人』	八ガキ文学	明39.07	○
20	春の夜	寂しみ	『愁人』	(未詳)		
21	幻影	森の妖姫	『愁人』	(未詳)		
22	街頭	出稼人	『愁人』	趣味	明39.06	
23	唄	人生	『愁人』	早稲田文学	明39.03	○
24	唄	暗愁	『愁人』	八ガキ文学	明39.07	○
25	木樵	叔母の家	『愁人』	(未詳)		
26	糸車	盲目	『緑髪』	早稲田学報	明39.02	
27	人と犬	樞	『緑髪』	早稲田文学	明40.08	○
28	赤い旗	歌の怨	『愁人』	新古文林	明39.08	
29	アイルランド	老宣教師	『愁人』	太陽	明39.04	○
30	夕暮	老婆	『愁人』	新声	明40.03	
31	午後の一時頃	霰に震	『緑髪』	新小説	明38.03	○
32	木立	笛の声	『緑髪』	新古文林	明39.10	
33	茶売る舗	漂浪児	『緑髪』	新小説	明37.09	○
34	天気になれ	漂浪児	『緑髪』	新小説	明37.09	○
35	童謡	懂がれ	『緑髪』	新潮	明39.01	
36	水鶏	水車場	『愁人』	早稲田文学	明40.01	○
37	古い絵を見て	盲目	『緑髪』	早稲田学報	明39.02	
38	星	深林	『緑髪』	趣味	明40.02	
39	菜種の盛り	深林	『緑髪』	趣味	明40.02	
40	おもちゃ店	長二	『緑髪』	読売新聞	明40.05.12	
41	お母さん	遠き響	『緑髪』	新小説	明40.01	○
42	トツテンカン	遠き響	『緑髪』	新小説	明40.01	○
43	沙原	日蝕	『惑星』	早稲田文学	明41.05	○
44	お江戸は火事だ	〈童謡五篇〉	『赤い船』	(未詳)		○、(注2)
45	童謡	〈童謡五篇〉・麗日	『赤い船』・『惑星』	少年文庫	明39.11	
46	烏金	烏金	『闇』	趣味	明42.03	○
47	黒い鳥	不思議な鳥	『闇』	趣味	明43.02	○
48	明日はお天気だ	遠き響	『緑髪』	新小説	明40.01	○
49	森	森の暗き夜	『闇』	新潮	明43.08	
50	景色	森の暗き夜	『闇』	新潮	明43.08	
51	雲降る	雪来る前	『闇』	新小説	明42.10	○
52	淋しい町の光景	烏金	『闇』	趣味	明42.03	○
53	風景	悪魔	『闇』	新文芸	明43.05	○
54	汽車	麗日	『惑星』	東京毎日新聞	明41.04.25-06.24	○、連載61回
55	童謡	〈童謡五篇〉	『赤い船』	少年文庫	明39.11	○
56	童謡	〈童謡五篇〉	『赤い船』	少年文庫	明39.11	○、初出題「子守唄」
57	厭な夕焼	酒肆	『惑星』	新小説	明40.09	○
58	海	麗日	『惑星』	東京毎日新聞	明41.04.25-06.24	○、連載61回
59	上州の山	麗日	『惑星』	東京毎日新聞	明41.04.25-06.24	○、連載61回
60	童謡	〈童謡五篇〉	『赤い船』	少年文庫	明39.11	○
61	黄色な雲	北の冬	『惑星』	新小説	明41.10	○
62	無題	捕はれ人	『惑星』	文章世界	明41.11.01	○
63	妙高山の裾野にて	麗日	『惑星』	東京毎日新聞	明41.04.25-06.24	○、連載61回
64	解剖室	麗日	『惑星』	東京毎日新聞	明41.04.25-06.24	○、連載61回
65	ある夜	麗日	『惑星』	東京毎日新聞	明41.04.25-06.24	○、連載61回
66	太鼓の音	鬼子母神	『緑髪』	読売新聞	明38.01.08-03.19	連載8回
67	帰途	鬼子母神	『緑髪』	読売新聞	明38.01.08-03.19	連載8回
68	草笛の音	鬼子母神	『緑髪』	読売新聞	明38.01.08-03.19	連載8回
69	あの男	鬼子母神	『緑髪』	読売新聞	明38.01.08-03.19	連載8回

*初出誌・紙にあたれていない作品は、網かけで示した。

(注1) 初出は従来「女子文藝」(明39.06)とされてきたが、当該号には掲載されていないことを確認した。他方、「女子文藝」(明39.07)の広告に「煎餅売(小説) 小川 未明」とあるので、こちらを初出年月としておく。この号にはあたれていない。

(注2) 「童謡五篇」は童謡で、小説ではないので、〈 〉を付けて他と区別する。

収蔵資料紹介

福田正夫宛小川未明書簡

①福田正夫宛小川未明葉書
大正九年七月十七日

【表】相州小田原在石橋 福田正夫様
東京牛込天神町二十三 小川健作

【裏】益々御筆硯の御多祥をお喜び申し上げます。「未墾地」拝受、有がたう存じます。「早急」に精読いたします。御地は海に近く、凌ぎよからんと存じますが、東京昨今の暑さ焼くか如く殊に病後の私は、堪へられない暑さをしてゐますが、幸に倒れず努力いたしてゐます。何卒、御自愛遊され御労作の御大成を願つてゐます。小栗君におあいのせつよろしく。いづれ拝眉の期萬々申し上げます 忽々

③福田正夫宛小川未明葉書
大正九年十二月五日

【表】相州小田原石橋 福田正夫様
小川未明

【裏】御著「未墾地」第二巻只今〔至〕拝受いたしました。有かたく厚く御禮申し上げます。十二月五日 小川未明
【裏】レーニン肖像画（絵はがき）



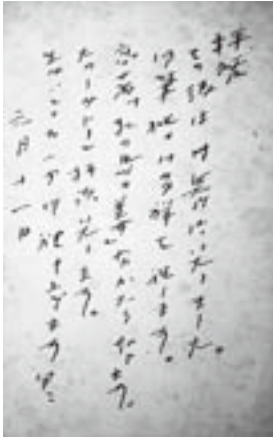
④福田正夫宛小川未明葉書
大正十四年六月十一日

【表】市外世田谷区下北澤八〇九佐藤住宅 福田正夫様
小石川雜司ヶ谷町七十六 小川健作

【裏】その後はご無沙汰いたしました。御筆硯の御多祥を祝します。高著「死の島の美女」有かたう存じます。たのしみにして拝讀いたします。先は、とりあへず御禮申し上げます 忽々 六月十一日

※適宜、ルビを付記した。

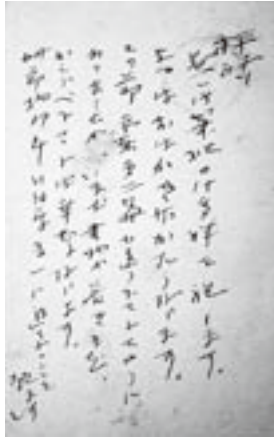
〈福田正夫〉（一八九三—一九五二）
詩人。神奈川県小田原市生まれ。処女詩集『農民の言葉』（大正五年）刊行以後、大正七年に雑誌「民衆」を創刊。詩の庶民化に尽力、民衆詩派の中心詩人として活躍。詩集『世界の魂』（大正十年）、叙事詩『高原の処女』（大正十一年）等がある。



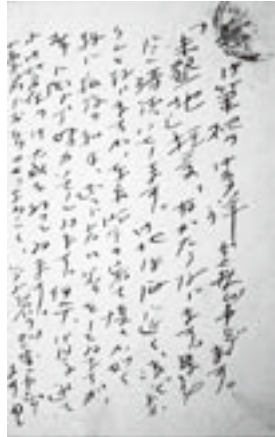
④福田正夫宛未明はがき
大正14年6月11日



③福田正夫宛未明はがき
大正9年12月5日



②福田正夫宛未明はがき
大正9年11月29日



①福田正夫宛未明はがき
大正9年7月17日

②福田正夫宛小川未明葉書

大正（九）年十一月二十九日

【表】相州小田原在石橋 福田正夫

東京牛込天神町二十三 小川健作

【裏】

拝啓

益々御筆硯の御多祥を祝します。先日はおはがき有がたう存じます。その節高著第二篇お送り下されたやうにありました。いまだ書物が着きません。おしらべ下されば幸いに存じます。時節柄何卒御自愛第一に遊されんことを願います

〈民衆詩派との交錯〉

右頁では、民衆詩派の詩人として知られる福田正夫に宛てた未明自筆の葉書四通を紹介している。四通のうち三通が書かれたのは大正九年で、未明が牛込区現新宿区)天神町に居住していた頃のものである。大正七年に長女の晴代を病気で失い、悲しみに鞭打たれながらも、「黒煙」の創刊(大正八年)、社会主義同盟発起への参加(大正九年)と社会的に弱い立場の人々のために活動していた時期にあたる。

一方で当時、小田原の小学校で教職に就いていた福田正夫は、前年の大正七年に文芸雑誌「民衆」を創刊している。誌名が表すように「民衆」は、大正デモクラシーを背景とする民衆芸術論の高まりの中から生まれ、自然や民衆の生活を自由な形式で詠い、詩を民衆に近づける役割を果たしたといわれる。「民衆」の創刊をきっかけとし活動していた福田正夫、白鳥省吾、百田宗治、富田碎花、加藤一夫らは、「民衆詩派」と呼ばれている。

この「民衆」は、白鳥省吾、百田宗治らが協力しつつも、福田の周辺にいた小田原在住者、出身者が中心となり活動していた。編集に携わっていた小田原出身の詩人井上康文の回想(「民衆」創刊前後)によると、小栗忠順(上野之介)の孫で、小説家志望であった小栗又一、歌人の花岡謙二らが同人として参加していた。井上はこの頃、未明の紹介で「新小説」の編集部へ入社したようである。大正九年七月十七日(①)の福田宛の葉書に、「小栗君におあいのせつよろしく」とあるのは、「民衆」の同人だった小栗又一のことと思われる。

今回紹介する福田正夫と未明との交友がどのようなかたちで始まったのか、早稲田大学出身で、同じく民衆派の詩人として活躍した白鳥省吾とのつながりから

考えるのが自然であろう。白鳥の回想によると、明治四十三年に秋田雨雀らと知り合い、この頃から早稲田出身の先輩作家と交友が始まったことがわかる。白鳥省吾大正三年の日記(白鳥省吾記念館所蔵)に、「未明氏を訪ねるも留守」(十月十日)とあり、未明との交友をあらわす記述を見ることが出来る。白鳥と福田が知り合うのは、この翌年の大正四年であった。

大正八年七月、白鳥の詩集『大地の愛』の出版記念会で、未明と福田は席を同じくしている。この日、民衆派の詩人たちにまじって出席した未明は、寄せ書きに「詩人の眼中には階級なし」と記したという(白鳥省吾『文人今昔』)。同年四月に、未明主宰の童話雑誌として創刊された「おとぎの世界」においても、白鳥福田らが数号にわたり童話、童謡詩を発表しており、この時期の未明と民衆詩派との交友を見てとることが出来る。

民衆詩派の一人 加藤一夫が中心となり発行した「科学と文芸」(大正四年九月創刊)もまた、民衆芸術運動の拠点となった雑誌であり、民衆詩派、人道主義者など幅広い作家たちが執筆していた。未明は、「科学と文芸」に「戦争」(大正七年一月)、「靴屋の主人」(大正七年四月)といった作品を発表し、小説「戦争」では、海の彼方で人と人が互いに殺しあう戦争が起きていることを知りながらも、他人事として平気で生活している人々への疑問と憤りが描かれている。

「科学と文芸」同様、民衆詩派の作家たちと未明との交錯が見られる場として、雑誌「労働文学」(大正八年二月創刊)や「種蒔く人」(大正十年十月創刊)があげられる。いずれも大正期を代表する労働文学雑誌といえる。この「労働文学」に、未明は「金の指輪」(大正八年四月)、「遠い処へ」(大正八年五月)を寄せ、一方の「種蒔く人」では、福田、未明ともに創刊号に

「執筆家」として名を連ね、未明は、第二号に小説「火を点ず」を寄せている。福田もまた、白鳥、加藤らと共に寄稿し、創刊号に、「種蒔き車」ほか三篇の詩を発表した。大正十二年六月には、この種蒔き社の発起で、労働文学に力を尽くしてきた未明、秋田雨雀、中村吉蔵を慰労する目的をもって「三人の会」が開かれ、会の席上、未明の童話「野薔薇」が朗読された。この「三人の会」開催前、「種蒔く人」誌上に掲載された「苦闘の三氏へ」(大正十二年七月)では、三人に対する文壇諸家からの感想が掲載されている。堺利彦、吉江喬松といった顔ぶれの中、福田正夫は未明について、「いつも社会と人生とに高い標識をかかげてある作家として尊敬しています」と書いている。「民衆の代弁者」として、「人類の生命の核心に徹しよう」(白鳥省吾「新詩壇の覚醒と民主的運動」)と理想を掲げ活動していた民衆詩派の詩人たちと正しく誠実な生活の中に芸術を見出していたこの時期の未明との間には、思想的にも重なる部分がある。

大正九年十二月五日付の書簡(③)では、福田から贈られた本への御礼が簡潔に記され、裏面にはレーニンの肖像が描かれた絵葉書を使用している。最高の芸術は、「人間性の向上にある」と考えていた未明は、レーニンの思想を、「血の流れである人間其のもの、哲学だ」と言っている(「戦争に対する感想」)。この葉書が出された四日後、未明は日本社会主義同盟の結成に参加している。民衆詩派との関わりの中にも、童話、小説ともに数々の力作を生み出した未明の豊かな思想性を読み取ることが出来る。

(安田香子)

参考 百田宗治編『民衆芸術選』(大正九年、聚英閣)

白鳥省吾『文人今昔』(昭和五十三年、新樹社)

『民衆』(複製版)(昭和五十八年、教育出版センター)

平成二十年度特別展（報告）

小川未明の東京 —童話作家宣言まで—

〔開期〕

九月二十七日（土）～十一月三日（月・祝）

〔期間中來館者〕 四、七〇六人

明治三十四年（一九〇一）春、十九歳の未明は、文学への強い憧れを抱いて上京します。以後、六十年あまりの年月を過ごし、生活の場、創作の場であった東京。特別展では、「未明が暮らした町東京」をテーマに、東京での生活、交友に光をあてながら、作品が生まれた背景を紹介しました。



第一章 上野・浅草

明治三十四年四月六日、まだ雪の残る故郷を出発した未明は、汽車の中から飛鳥山の桜を眺め、夕暮れの上野駅に着きます。当初、都会生活への不安を抱きながら降り立った上野も、やがては絵画展を見に出かけ、公園内を散策したりと、未明の生活の中に溶け込んでいきます。

一方、上野公園とともに国内で最初の公園に指定され、十二階（凌雲閣）をシボルに活動写真や見世物小屋が立ち並び浅草を、未明は小説「空中の芸当」（大正九年九月）に登場させています。

第二章 早稲田界限
東京専門学校（現 早稲田大学）入学後に暮らした早稲田界限の町は、未明にとって、恩師、友人たちと出会い、作家として歩み始めた場所でした。卒業後、夜勤記者をしていた頃は、銀座にあった読売新聞社に通い、真夜中の街を歩いて帰る生活を続けながら、日中の賑やかな街とは異なる都会の夜の静寂を経験します。

こうした記者勤めも長くは続かず、文筆に専念することを選んだ未明の生活は苦しく、書いたものが認められず、二人の子が栄養不良に陥るなど苦悩しました。

第三章 牛込・神楽坂

大正三年頃から十一年の春にかけて、未明は神楽坂近くの矢来町、天神町に住んでいます。毘沙門の縁日で賑わい、夜店の燈火に誘われるように人々が集まる神楽坂へ、毎日のように散歩に出かけました。

この頃未明は、「金の輪」、「赤い蠟燭と人魚」といった代表作を生み出す一方で、長男哲文と長女晴代を相次いで亡くします。神楽坂界限のこの町は、未明が悲しみに耐えながら、人生の矛盾と不平等に対して戦っていくことを決意した場所でもありました。

第四章 雑司ヶ谷

早稲田、神楽坂界限の賑やかな町を好んだ未明ですが、雑司ヶ谷（現 目白台、西池袋付近）に暮らしたこともありました。明治四十四年前後の数ヶ月と大正十一年の夏から昭和五年に高円寺に家を持つまでの間で、近くには雑司ヶ谷墓地があり、亡くなった二人の子供が眠っていました。雑司ヶ谷には、友人の秋田雨雀が暮らしており、鈴木三重吉の赤い鳥社もありました。

未明はこの雑司ヶ谷に比較的長く暮らし、やがて「童話作家宣言」として知られる「今後を童話作家に」（大正十五年五月）を発表し、童話創作に専念することを決意します。

第五章 故郷 春日山への手紙

上京後は、故郷に帰り住むことのなかった未明でしたが、故郷は常に心の支えとなっており、その風景や思い出は、数々の小説、童話作品の源となりました。少年時代、春日山神社建立（父澄晴の事業）のために移り住んだ春日山の自然の中で、未明は美しいものや正しいものを愛する心を育みました。

春日山に住む両親を思う未明の気持ち、春日山神社に残る手紙の数々に表れています。

協力者一覧（展示資料借用）

- 岡上鈴江 小川英晴 小川家
- 海津加寿子 春日山神社
- 日本近代文学館
- 美濃加茂市民ミュージアム

（敬称略）



図録「小川未明の東京」頒布中

収録

- 「岡上鈴江氏に聞く—未明が暮らした町東京」
- 寄稿「小川未明の東京風景」中島国彦

文学館講座小川未明の詩

平成二十年度の文学館講座は、「小川未明の詩」をテーマに、杉みき子氏、若林敦氏、小川英晴氏の三人を講師に開催しました。このうち、若林氏については、未明の詩集『あの山越えて』について巻頭にご寄稿いただきましたので、一回目、三回目の講座内容の一部をご紹介します。

第一回「未明の童謡」十一月一日(土)

児童文学作家 杉 みき子氏



私は、未明の詩、童謡は、その根源のものが短いはやし言葉みたいな言葉の中にあるんじゃないかと思えます。未明のエッセイ「単純な詩形を思ふ」を読んでおきますと、未明さんという人は本当に自然の中から沸き起こる、特に子供が自然に対して受け止める感情、そういうものを非常に大切にしていたんだということがよくわかるような気がします。私は

正直に言いまして、未明の童謡を読んでもおきますと、童話の方がずっといいなあと感じますが、童話の方がいい童謡の味があるんですけれども、やっぱり童話の方が未明さん本来の姿なのではないかなと思います。といいますのは、未明さんという人はもともと、心底詩人だったんだと思うんですね。だから無理して詩の形を書かなくても良かったんじゃないかと思うわけです。坪田譲治さんも書いているように、未明の童謡は、特に前期のものは、詩に近いもの、散文詩に近いもの、散文詩のひとつ、そういうふうには私は感じます。詩人は、本当に簡潔な描写で、深い長い高い大きい内容を歌い上げてしまわなければならない。だから、形は普通の散文でも、その内容は未明のもっていた詩情が十分に溢れたもの、それが彼の童話だと思えます。

第三回「小川未明の詩」十一月十五日(土)

詩人・未明孫 小川 英晴氏



詩を作り始めた十八歳の頃、未明の自宅に行きますと、すでに祖父は亡くなっていましたけれど、未明の主要な本がその書棚に大切に納められていました。その中に、小さい『あの山越えて』というこの詩集がありました。詩集を一通り読んだんですけど、その時私は現代詩を書いていましたのでちよつと違和感を覚えたんですね。この『あの山越えて』に収められている詩はどちらかというとわらべ唄、子守唄的な作品が中心で、一般的な詩も含まれていません。たんですけど、そういうものが当時の私の心境と少しそぐわず、なかなかこの詩を理解する事が出来ませんでした。その後、詩とは何かということを考えるようになり、『あの山越えて』を改めて読み返したとき、そこにはわらべ唄、子守唄の匂いみたいなものがあるな、日本人の魂みたいなものがあるなと感じました。そして、詩人として重要なことは、詩をうまく書くことよりも、詩人としての生き方のほうにあるのではないかと思うようになったのです。

未明の詩論ですけど、まず未明の父の小川澄晴の存在がとても大きな意味を持っていたということがいえると思えます。未明は哲学や英文学を勉強はしましたが、もっと日本的な精神を、端的に言えば武士道に通じる精神を大事にしていました。そして上越の自然を何よりも愛していました。今回この『あの山越えて』を読んで、これはおそらく、妙高の向こうには東京がある、あるいは東京からあの山を越えていけばまた故郷があるという二つの思いの中で出来た詩集だと思うんですけど、やはり上越の自然なくして生まれ得なかった作品ではないかというふうに私は思います。

未明は西洋文明に対して、敵意みたいなものを感じて、それとは一線を画す立場を終生とり続けました。なぜならば文明というものはある面で金持ちと貧困の差を大きく作ってしまった、そこに階級を作ってしまうというんですね。それに対して未明は常に弱者の立場に立って発言していた。そしてひとつの理想郷を童話の世界で実現しようとしていたのだと思います。そして未明は感激や感動の中にこそ詩があると言っています。つまり人間につき動かす力こそが詩であるといっているわけです。

最後に、祖父 未明の思い出ですが、小川家は笑いの絶えない家で、祖父は誰かの笑い声が聞こえると、奥の部屋から出て来て話にまじりたがるという寂しがり屋の一面もありました。若いころから食欲が旺盛で、好物の蕎麦を何杯も食べたり、よく新宿の方へ飲みに行っていたようです。骨董が好きでお金があると使ってしまうので、生活は一時期、大変だったそうです。祖母(未明妻キチ)は、一度も手を通してはいない着物をお金に換えるなど、生活にはだいぶ苦労したようです。未明の作品には、祖母と二人三脚で歩んできた未明の生き方が表れていると思います。

文学館一年の記録

朗読研修会

五月三十一日・六月二十一日・七月十九日

参加者 29名

橘由貴さん（ヴォイスアーティスト・朗読療法士）を講師に、朗読研修会を開催しました。研修会では、声と発声の基礎から魅力的なことばの表現方法まで学び、演習では、未明の童話「月夜と眼鏡」の朗読をグループごとに発表しました。受講者は、朗読は全く初めてという方から朗読ボランティアとして活動されている方などさまざままで、「朗読の奥深さとすばらしさにふれることができた」、「声の持つ魅力に驚いた」といった声がありました。

文学館ワークショップ①

消しゴムはんこでミニ絵本を作ろう！

七月二十七日

参加者 15名

物作りを通して、本に対する親しみや愛着を持ってもらおうと、消しゴムはんこでミニ絵本を作るワークショップを開催しました。上越市在住の手づくり・イラスト作家 Honokoさんを講師に、消しゴムはんこ（版画）を使って、未明の童話「古巣」を題材とした手づくり絵本を作りました。子どもから大人まで、カッ

ターを器用に使いながら「古巣」に登場するツバメやラッパのはんこを彫り、最後には十五冊のすてきな童話絵本が完成しました。

童話創作講座

十月五日・二十六日・十一月九日

（入門コース）

十月十二日・十九日（実践コース）

参加者 15名

上越市在住の児童文学作家 杉みき子さんを講師に、入門と実践コースに分かれて短篇童話の書き方について学びました。受講者それぞれが、日々の生活の中で感じたこと、不思議に思ったことなどを種に、推敲を重ねながら作品を創作していく姿が印象的でした。受講者の皆さんの作品は、「童話創作講座受講者作品集」として、文学館の図書コーナーで読むことができます。

特別展

小川未明の東京―童話作家宣言まで―

九月二十七日～十一月三日

来館者 4706人

未明が暮らした東京の町をテーマに、「童話作家宣言」（大正十五年）にいたる軌跡と豊かな交友を紹介しました。上京後、故郷の友人に宛てた手紙や、坪内逍遙、島村抱月、正宗白鳥など恩師、友人たち

から送られた書簡、未明の肖像画（柳敬助画）など七十一一点の資料を展示しました。開催初日の記念講演会では、栗原敦さん（実践女子大学教授）を講師にお迎えし、「小川未明の東京」をテーマにご講演いただきました。地図を参考にしながら作品やさまざまな逸話に触れ、参加者からは「上京して人との出会いが、自己の作品として生かされていることがわかりました。」「未明の暮らした町のおもむきを、身近に感じることができました。」といった感想が寄せられました。特別展について、詳しくは、「特別展報告」の頁（八頁）で紹介しています。

こどものための朗読講座

十月五日・十二日・十九日

参加者 15名

未明ボランティアネットワーク主催によるこどもを対象とした朗読講座を開催しました。未明童話「千代紙の春」を題材に、朗読グループと紙芝居グループにわかれ、登場人物の心情などを考えながら、発声方法、表現方法を学びました。最終回には、見に来てくれたお客さんの前で発表会を行い、最初は少し緊張していた子どもたちも、最後までしっかりと朗読し、朗読の楽しさと人に伝える難しさを味わってもらえた講座となりました。



消しゴムはんこで絵本づくり



朗読研修会

手づくり絵本ワークショップ

十月二十五日

参加者 30名

未明童話「月夜とめがね」を題材に、とびだす絵本を作りました。手づくり絵本木いちこの会のみなさんのお手伝いで、色紙やモール、クレパスなどを使つてのオリジナル絵本を作りました。同じ材料を使つていながら、一つとして同じものはなく、子どもたちの発想のすばらしさに驚かされました。

童話が開く心の扉

朗読と映画による小川未明の世界

十一月十二日・十三日・十四日

毎年、市内の小学六年生を対象に開催している朗読コンサートは、八回目を迎え、橋由貴さんの朗読と翠川敬基さんのチェロで未明童話「赤い蠟燭と人魚」「月夜と眼鏡」の幻想的世界へと誘われました。今年は五〇校一八三七人の生徒が参加しました。



第十七回 小川未明文学賞贈呈式

十一月二十一日

「小川未明の文学精神を次の世代に継承し、子どもたちの心に夢と希望を育む」ことを目的に平成四年から募集している第十七回小川未明文学賞の贈呈式を東京都内で開催。大賞は、ながすみつきさんの「空と大地と虹色イルカ」、優秀賞は、森夏月さん「七日七夜の朝に」と、もりおみつきさんの「ティダピルマ」でした。文学賞のページで、大賞のながすみつきさんからの「受賞の言葉」を紹介しています。

文学館講座 小川未明の詩

十一月一日・八日・十五日

参加者30名

「小川未明の詩」をテーマに、連続講座を開催しました。講師は、第一回杉みき子さん、第二回若林敦さん、第三回小川英晴さんの三人で、それぞれのお立場で、時にユーモアを交えながら、示唆に富むご講義をいただきました。「未明における詩と小説は、その源流は一緒であるということが判り、興味を持ちました。作品などすべてにその人の心、人間性があらわれると聞き、身をひきしめました。」といった声も聞かれました。詳しくは、文学館講座の記録の頁（九頁）で紹介しています。

文学館ワークショップ②

消しゴムはんこでミニ絵本を作ろう！

十二月十三日

参加者 15名

文学館ワークショップの第二弾として、未明の童話「酔っぱらい星」をモチーフに冬のカードを作りました。はじめに、「酔っぱらい星」のおはなし会を開いた後、手づくり・イラスト作家のnanocoさんを講師に、消しゴムはんこ（版画）を使い、仕掛けのあるオリジナルのカードを作りました。

小川未明と絵てがみ展

二月二十一日～三月二日

市内の小学校六年生を対象に開催している「童話が開く心の扉」朗読コンサートを鑑賞した生徒たちから小川未明に宛て、絵手紙を描いてもらいました。大賞作品は、古川幸奈さん（北諏訪小学校）の「あらしの中」でした。



文学館講座第2回



手づくり絵本のワークショップ

作品の中の風景②

東京・雑司ヶ谷



雑司ヶ谷鬼子母神

特別展「小川未明の東京」(平成二十一年秋)開催前の六月、未明が暮らした雑司ヶ谷界隈(現在の目白台、西池袋付近)の町を歩いた。十九歳で故郷高田から上京した未明は、母校早稲田大学近辺の早稲田南町、矢来町、天神町といった町を転々と移り住んでいる。

親しい友人たちが近所に住み、神楽坂の喧騒が聞える賑やかな早稲田、矢来、天神町と比べ、当時の雑司ヶ谷は、まだ自然の残る一帯であった。未明が雑司ヶ谷に住んだ時期は、明治四十四年前後の数ヶ月と大正十一年の夏からの八年間にあたり、地理的には、小石川区雑司ヶ谷(現文京区目白台)、豊島郡高田町雑司ヶ谷(現豊島区西池袋)付近である。

当時の面影を辿るため、早稲田から都

電荒川線に乗り、雑司ヶ谷駅で下車。ほどなく雑司ヶ谷霊園の北西に出た。明治七年に開かれたこの墓地には、小泉八雲、島村抱月、夏目漱石をはじめとする多くの文化人の墓がある。未明にとって、懐かしい恩師や友人、そして幼くして亡くなった二人の子供が眠る特別な場所であった。

この頃自分は、雑司ヶ谷の墓地に行ってきた。四邊には、無数の新しい墓や古い墓が立っている。一面遠く雑司ヶ谷の森が見え、赤煉瓦の巣鴨監獄が新緑の中に横はって、白い光がキラ／＼と葉裏を照してある。唯寂々として小鳥の聲より外に何の音も聞えない。自分は久し振りでハーン先生の墓前に立つた、今更ながら今昔の感に堪へない。

未明随筆「晩春の感慨」明治四十二年六月
早稲田大学在学中、八雲(ラフカディオ・ハーン。以下ハーンと略)の講義を受け、卒論にハーンを取り上げるほど深い影響を受けた未明は、急死したハーンの墓前に立ち、思いをめぐらしている。霊園は、ケヤキの古木が多く残っており、周辺の首都高速や高層ビルを尻目に、今もゆったりとした空気に包まれている。雑司ヶ谷に暮らしていた時期、未明は新緑の美しい初夏に、真っ赤な夕日が空を染める冬にと散歩へ出かけた。

雑司ヶ谷霊園から六〇〇メートル程離れた場所に鬼子母神堂がある。都電荒川

線の鬼子母神駅を下りると、イチヨウ並木の参道が見えてくる。未明が早稲田大学在学中、読売新聞に発表した小説「鬼子母神」からは、学生時代、早稲田から足をのばし、散策を楽しむ未明の姿が彷彿としてくる。

赤色だの、紫色の紙片で出来た風車が、竹の尖に結び付けて、幾本となく店頭に吹く秋風に小止みななくめぐってくる。尾花細工の赤い耳のある鼠色の木菟が、それらのうちに交っている。

大きな杉の木立の下にハ、居並ぶ小間物店やら、雑菓店などが獨り賑かに見える。遠方で聞いたときには、お婆さんみたやうに優しい音色だと思った太鼓の音が、遽かに高く太くなって、鼓膜でも破りそうなの。しかしなんとなくお寺の境内へ入ると、子供らしい気持になった。

未明小説「鬼子母神」明治三十八年一月
*尾花：ススキ

ススキの穂で作られた郷土玩具「すすきみみずく」や、色とりどりの紙片がついた風車を商う店で賑わう鬼子母神境内の様子を描かれている。非日常の寺院に入り、「お寺の境内のありとあらゆる人は、善人であるらしい」という気持ちになる主人公「私」の精神の高ぶりが全編を覆い、やがて、祖母に連れられて行った故郷の鬼子母神の思い出や、境内ですれ違った娘に前世の恋人の面影を見るという空

想へと流れて行く。

自伝的要素を多分に含んだ小説とされる「麗日」(明治四十一年)でも、友人と鬼子母神境内の掛茶屋で団子を食べながら休む様子が描かれる。ススキの郷土玩具や名物の団子は、今も訪れる人を楽しませてくれる。

鬼子母神近くには、明治三十八年頃から秋田雨雀が暮らしていた。雨雀は「森の会の記録」(明治四十五年四月「文章世界」)において、相馬御風、未明をはじめ雑司ヶ谷の森に集まる作家たちと、この地にアトリエを構える斎藤与里、柳敬助といった画家たちの豊かな交友を記している。「段々温かになった。己達の森へもちよいちよい都会の連中がやって来るじゃないか。森の季節も来たのだから、何か一つ面白いことを初めやうじゃないか」という一節に、雑司ヶ谷の自然へ引き寄せられ集まった若き芸術家たちの気焔を感じることができる。

(安田杏子)



雑司ヶ谷霊園

小川未明文学賞

第18回募集要項

小川未明文学賞は、日本児童文学の父といわれる上越市出身の小川未明の文学精神「人間愛と正義感」を次代に継承するため、平成四年に創設されました。子どもたちの心に夢と希望を育むような鮮烈な児童文学作品を募集しています。今年で十八回目を迎え、これまでに延べ八〇〇〇編を超える作品が国内外から寄せられました。



文学賞授賞式

◆募集作品

- ・ 小学3～6年生を読者対象とした創作児童文学で、内容・形式は自由。
- ・ 400字詰め原稿用紙で50枚～120枚
- ・ 未発表作品に限ります。

◆応募資格

年齢、プロ・アマを問いません。

◆応募方法

上越市文化振興課へ郵送または持参してください。

◆締切り

平成21年7月31日（金）

◆入選作

（当日消印有効）

・ 大賞1作（ブロンズ像・賞金100万円

・ 副賞）

・ 優秀賞2作（賞金20万円・副賞）

◆発表

大賞・優秀賞の受賞者は、11月上旬に本人に直接通知します。

◆贈呈式

平成21年11月下旬（予定）

（会場・上越市内）

応募・お問い合わせ先

〒943-0832 新潟県上越市本町5-509
 ランドビル2F 街なかサテライト内
 上越市文化振興課
 「小川未明文学賞係」
 TEL 0256-5266-6900
 TEL 0256-5266-6903
 FAX 0256-5266-6904
 E-mail: mimei@city.joetsu.niigata.jp

受賞のひとこと

この度、小川未明文学賞という身に余る賞を戴き、感謝の念にたえません。児童文学賞の中でも、受賞作が単行本として上梓されるものはそれほど多くはなく、本賞はその一つであり、書き手にとって強く意識されているコンテストだと思います。

長年この賞を主催されている上越市並びに関係者の方々の努力と熱意に、この場を借りて深謝いたします。

改めて未明童話を読み返してみると、短い話の中にちりばめられた深く鋭い洞察力と豊かな人間愛に、感銘させられます。

代表作「赤いろうそくと人魚」はもちろんのこと「野ばら」、「しいの実」、「飴チョコの天使」等々、どれも心に響くものばかりです。

要項にあるように、未明童話の精神を継承する作品、とはまだまだおこがましいですが、今回の受賞作で腐心した点を述べてみたいと思います。

ストーリー作りもさることながら、魅力あるキャラクターを描き出すことに傾注しました。読者と等身大のキャラクター。読者がキャラに感情移入し、一緒に

なって物語の世界を楽しめるような作品を理想とし、それを心がけました。海を舞台に主人公の空と大地が、原稿用紙から飛び出す勢いで生き生きと、かつ

大胆に暴れまくってくれたおかげで、今回の受賞に結びついたのだと思います。今後は、未明賞の名を汚さぬようさらに精進し、読者が夢中になれるような作品が描けたらと願っております。

—応募される方へ。

しっかりと子どもたちを見つめて、想いを紡げば、未明賞は皆様にきつちりと答えてくれるコンテストです。ぜひ、次回の幸運があなたに舞い降りることを願っています。

まだ上越の地を訪ねたことはありませんが、受賞をご縁に機会を作って、家族と一緒に未明生誕の地を散策したいと思っています。

第17回小川未明文学賞大賞受賞 **ながす みつき**



学校・地域へ出張おはなし会

未明ボランティアネットワークでは、学校や地域へ出張おはなし会に出かけています。平成20年度は、13校の小学校に出かけ、秋には、町家交流館高田小町でおはなし会を行いました。



大手町小
6/23

未明の母校である上越市立大手町小学校へ出張おはなし会へ出かけました。6月の「読書旬間」に合わせ、1年生から4年生を対象に学年ごとにわかれ、紙しばいや大型絵本を使って「赤い蝋燭と人魚」、「月夜と眼鏡」といった未明の童話を朗読しました。

担当の先生から

感情のこもった朗読の仕方、やさしい語り口に、普段元気な子どもたちも、しっかり耳を傾けていました。

町家の公開イベントに合わせ、町家交流館高田小町で、初めてのおはなし会を開きました。パネルシアター、映像を使って「時計のない村」、「真心のとどいた話」、「千羽鶴」の三作品を紹介しました。集まった方々からは、「町家のしっとりとした雰囲気の中で、おはなしを聴くことができ良かった」といった声がきかれました。爽やかな秋の日、高田の町に集まった子どもから大人の方まで楽しんでいただきました。

高田小町
10/12

森のおうちで おはなし交流会

平成20年度のボランティア研修として、6月17日、絵本美術館 森のおうち（長野県安曇野市）を訪ねました。高樓方子・千葉史子姉妹展を観賞後、森のおうちお話の会の皆さんと、「交流おはなしコンサート」を実施しました。森のおうちの皆さんからは、宮澤賢治 作「セロ弾きのゴーシュ」、「雨二モマケズ」など、心が透きとおるようなすばらしい朗読があり、未明ボランティアからは、未明作「千羽鶴」を映像と音楽で発表しました。

おはなし会の後は、意見交換などで有意義な一日を過ごしました。



森のおうちのみなさん

出張おはなし会、会員加入の連絡先 〒943-0832 上越市本町5-5-9（ランドビル2階）
上越市文化振興課
TEL：025-526-6903 FAX:025-526-6904
E-mail:mimei@city.joetsu.lg.jp

のばら

未明ボランティアネットワークだより

vol.5

発行：未明ボランティアネットワーク

発行日：2009年5月30日

平成20年度の活動

- ・小川未明文学館ビッグブックシアターおはなし会（毎月第2・4日曜日午後2時～）
- ・小・中学校、地域への出張おはなし会
- ・特別展への協力（こども朗読講座、手づくり絵本ワークショップ、おはなし会、展示監視）
- ・会員の研修（絵本美術館 森のおうちへ）

特別展おはなし会

特別展期間中の10月26日(日)、ボランティア全員でおはなし会を開催しました。オープニングは、「雲の如く」(瀬下健二作曲)のコーラスで、フルート、キーボードの伴奏で始まり、「赤い蝋燭と人魚」(大型紙芝居)、「月夜とめがね」(OHP)、千羽鶴(パネルシアター)と特色ある演出で未明童話の世界を子どもから大人まで大変楽しんでもらえました。当日は大人の参加者が多く、今後の活動の励みになりました。



子ども朗読講座

特別展開催期間中の10月5日・12日・19日の日曜日、子どもを対象とした朗読講座を開きました。小学生から大人まで15名の参加者があり、未明の童話「千代紙の春」を、紙芝居コースと朗読コースに分かれて練習しました。最終回は、読み手も聞き手も一体となって楽しい朗読発表会となりました。最後に、手づくりの修了証を受講者へ贈呈しました。



子ども朗読講座



出張おはなし会 於：大手町小



高田小町でおはなし会

● お知らせ ●

小川未明関係資料の収集について ご協力のお願い

小川未明文学館では、未明に関係する文学資料の収集に努めています。下記の資料に関する情報をお持ちの方は、ご連絡くださいますようお願いいたします。資料の寄贈については、特定の場合（すでに複数点を所蔵している資料等）を除きお受けしますので、ご不明の点はお問合せいただくと幸いです。

【主な収集資料】

1. 特別資料

小川未明原稿、書簡、遺品、その他自筆資料（短冊・書軸等）、写真（オリジナル）、小川未明関係者資料（未明書簡、献本など）

2. 図書

未明作品集（未明生前・没後刊行図書）、全集・選集（未明作品を一部所収した資料も含む）、初出雑誌（未明作品掲載）、未明作品の外国語訳、絵本・紙芝居

3. 参考資料

未明に関する研究論文、エッセイ、記事（雑誌・新聞等）

平成21年度 小川未明文学館カレンダー

- 5月 朗読研修会 講師：橋 由貴さん
5月30日・6月20日・7月25日 *いずれも土曜日
- 7月 小川未明文学賞締切り 31日（金）
- 9月 特別展「つながるいのち『金の輪』・『ものぐさじじいの来世』絵本原画展」（仮）
9月12日（土）～10月12日（月・祝）
- 10月 童話創作講座 講師：杉みき子さん
入門コース 9月20日・10月11日・18日
実践コース 10月4日・25日 いずれも日曜日
- 11月 文学館講座（予定）
- 12月 企画展「『よっぱらい星』小川哲郎挿絵原画展」（仮）
11月28日（土）～12月13日（日）
- 2月 小川未明と絵てがみ展
2月27日（土）～3月7日（日）

特別展・企画展の他に、随時小企画展を開催。

毎月第2・4日曜日午後2時からおはなし会を開催。

小川未明文学館のご利用案内

開館時間

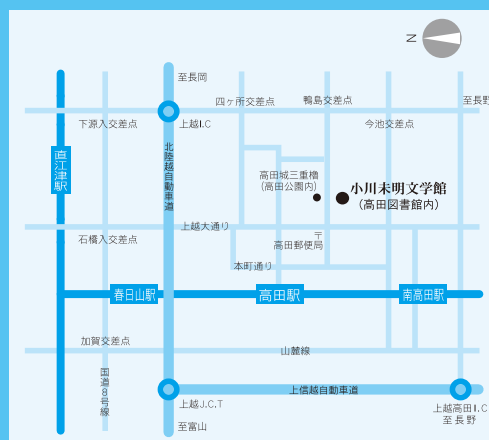
火～金曜日 午前10時から午後7時
（6月から9月の間は午後8時まで）
土・日・休日 午前10時から午後6時

休館日

毎週月曜日（この日が休日の場合はその翌日）
休日の翌日・毎週末日・年末年始（12/29～1/3）

入館料 無料

資料整理期間



お問合せ

〒943-0835

新潟県上越市本城町8-30（高田図書館内）

TEL 025-523-1083

FAX 025-523-1086

URL <http://www.city.joetsu.niigata.jp/sisetu/ogawa-minei/index.html>